テーテユースの指輪

-keito-

テーテュースの指輪

　面倒なことになった、と眠りながら僕は思っていた。
　ホテルの部屋で憂鬱な気分でまどろんで、物憂いままに目を覚ました。室内はひどく乾燥して、サイドテーブルに置いたぬるいビールを口に含むと荒廃したアルコールの匂いと酸味が、いつまでも鼻と喉に漂った。隣では彼女が僕に背を向けて眠っている。その後ろ姿は怒りをいまも訴えているようだった。カーテン越しに漏れる陽の光はまだかすかだったけれど、彼女に気付かれぬよう僕は静かに服を着た。

　こっそりと部屋を出てエントランスを抜けるとそこはすぐにビーチだ。大きく弧を描いた海岸の先にみえる山には、のぼりはじめた太陽が空と山との境界をほのかな黄橙に染めている。
　僕は波打ち際にそって砂浜を歩いた。サンダル越しに感じる砂はまだひんやりとしていて、沖に見えるサーファーたちが穏やかに波に揉まれている。海は青く澄んでいて、東京の灰色で濁った海とはずいぶんと印象が異なっていた。
　彼女は最近仕事がうまくいっていない。帰ってくるといつも悔し涙を流していた。つらいのなら辞めればいいと何度説得しても、彼女は決して首を縦には振らない。そんな彼女を気分転換だと言いきかせて旅行に連れだしたまでは良かったのに、昨晩は些細なことからまた喧嘩になってしまった。彼女のために良かれとすることが、近頃はいつも裏目に出てしまう。

　少し歩いた先に古びた桟橋を見つけた。その小さな桟橋の縁に腰掛けて波間から透けてみえる海をぼんやりと眺めた。派手な色をした魚たちが優雅に泳いでいる。わずかな風が道路につらなる椰子の葉をゆらして乾いた浜辺の香りを漂わせた。
　曙光が昇りはじめると、海はゆるやかに姿を変えた。海面は太陽をうつしかえす鏡となって波が動くたびきらきらと光る。ふと目を凝らすと桟橋の下にひときわ鋭いきらめきがあった。珊瑚に気をつけながらサンダルのまま海へと入ると、水はじんと冷たくて波があっというまにズボンを海水で染めた。
　僕は海の底に沈む光の源を、逃がさないよう慎重にすくった。手のなかには指のすきまから流れおちる透明な水と白い砂、そして金色の指輪が残った。きっと誰かがうっかり落としてしまったのだろう。それほど高価な品物には見えないが、細いリングの台座には小さな石がはめこまれている。そのわずかに緋色を含んだガラスのような石ころが、日差しを浴びて燦然と輝いていたのだった。
　濡れた指輪をシャツで拭って朝の光にかざす。指の先でプリズムのように陽を反射する石は確かに綺麗だったが、海を透かしてみるときほど美しいとは思えなかった。それは海が空より澄んでいるからかもしれないし、僕の手が砂より汚れているからかもしれなかった。

　しばし考え、持ち主には悪いと思いながらも僕はそっと指輪を海に還した。波が砂をさらって淡い光が揺れる。しかし指輪は水底にとどまって、流されたりはしなかった。そのうつろう様子

をしばらく眺めた後、ホテルへ引きかえす。
　ゆっくりと歩きながら、彼女が起きる前にベランダに朝食を用意したらどうだろうかと考えた。香りの立ったとびきり熱いコーヒーを片手に、両面をしっかり焼いた目玉焼きを食べ、パパイヤジャムをたっぷり塗ったトーストをかじる。そうして今日の予定を語りあう。食べてる彼女はとてもチャーミングで、僕はその顔を見ているのがいつも好きだった。今朝も目覚めたときに彼女がいて、それだけでもきっと素晴らしいことだったはずなのだ。
　途中で犬を連れた見知らぬ中年女性とすれ違い、早朝の気軽さからか互いに笑顔で挨拶を交わした。犬はときどき女性を仰ぎ見ながら砂の上をしっかりした足どりで歩いていく。
　今日は始まったばかりで、二人の距離もまだ昨日以上には離れてはいない。
　それはとても素晴らしい考えのように僕は思えた。

あとがき

400字から参加できる『恋愛風景』コンテスト
に応募した作品を 若干手直ししたものです。

きちんとしたストーリーがあるわけではありません。
コンテストのテーマは「恋愛風景」ということで 、
ある男のありふれた恋愛感情をひとつ切り取ってみたつもりです。

心がけひとつで世界が変わることに、気付いた人だけが人生を楽しめる。
そんな心境でしょうか。

最後まで目を通して頂いた、すべての方に感謝をいたします。

2012/1/22 第一版 恵賭

コメントに感想など頂けると嬉しいです。